

書評

[評者]

水沼 英樹

弘前大学医学部産科婦人科
教授／日本女性医学学会理
事長



女性を診る際に役立つ知識

武谷雄二 編著

A5判 頁264 2012年

定価 4,725 円(本体 4,500 円+税 5%)

[ISBN978-4-88002-828-6]新興医学出版社刊

「女を見たら妊娠と思え」という女性蔑視もどきの表現は、妊娠診断検査薬が存在しなかった時代においては、産婦人科医にとって基本的な必須知識であり知恵であった。女性にみられる子宮出血、下腹痛、嘔気、便秘、食欲不振などの症状は妊娠でもしばしばみられる症状であるために、それらが妊娠によるものかそうでないのかを最初に見極めることは、その後の治療法を選択するうえできわめて重要であるからである。つい最近も笑うに笑えぬ話を耳にした。卒業したての初期臨床研修医がMRIで異所性妊娠を診断したという話である。これを語ったベテラン産婦人科医は「皆さんは異所性妊娠のMRI画像を見たことがありますか？」と言ってその画像を供覧してくれたが、多くの産婦人科医にとっては初めて目にする画像であったろう。なぜなら、産婦人科なら当然、最終月経を尋ね、遅れていれば妊娠を疑い、妊娠検査や超音波検査で検討を行うので異所性妊娠の診断をMRIで行うことはまずない。ところが、その病院ではたまたま産婦人科医が不在であり、また初期研修医が当直していたために、腹痛の診断マニュアルに則りMRI検査が施行され、貴重な(?)画像が残されたのである。「女性を診るうえでの基本的な知識」があれば、最初からMRI検査が行われることはあり得なかったに違いない。

このたび、「女性を診る際に役立つ知識」が新興医学出版社から刊行された。東京大学名誉教授の武谷雄二先生が編者となって、第一線で活躍している専門医師が項目別に役立つ知識を解説している書籍である。過去にも産婦人科領域の診断や治療学に関し多数の類書が刊行されているが、それらの類書の教科書的な記述様式と異なり、本書では、女性であることの特徴が女性に現れる徴候や個々の疾患の発症・進展にどのような影響を及ぼし病態の形成に関与していくかを知るということを基本姿勢として編集してある。臨床医としてまた生殖内分泌学の泰斗として長年活躍されてこられた武谷先生の意図するところがよく反映された一

冊である。治療は正確な診断を下すことから開始されるが、その診断に至る過程は必ずしも一様ではない。限られた情報のなかでいかに効率的かつ的確な診断が下せるかは担当医の病気を診る目に負うところが少なくない。本書は病気を診る目の育成に必要な知識だけでなく、病気を診るうえで有用な知恵までも涵養してくれる。

本書に「女性を診る際に役立つ知識」と銘打った編者のポリシーはその構成からも窺知できる。編者自身が「女性を診る際の留意点」として性成熟期にある女性における諸症状・疾患の特質を詳述した後、第2章以下で「女性特有の症状・病気」、「女性によくある症状・病気」、「女性とくすり」、そして「予防医学」という章立ての下で各執筆者が各症状や疾患について解説している。特筆すべきは他科疾患にも多くの頁が割かれており、後述するが、これは女性医学と呼ばれる産婦人科の新しい診療領域を念頭において編集されたものと思われる。項目毎に要約がまとめてあるのも、忙しい読者にとってありがたい構成である。

従来、産科婦人科学は周産期医学、婦人科腫瘍学、生殖内分泌学の3領域からなり、それぞれが独立して専門領域を構築し発展してきた。最近になって、女性のQOLの維持向上を目指し、女性に特有な心身にまつわる疾患を予防医学的観点から取り扱うことを目的とした女性医学と呼ばれる分野が創設され、産科婦人科学に新たな専門領域が設けられてきた。女性医学の本質は従来の独立した専門領域を有機的に結合させる点にあり、そのためには産婦人科の専門領域の知識に加え、他科領域の、とくに総合医療の知識をも交えて全人的に患者を診ていく知識が重要となる。この点において、本書はまさに女性医学を実践するうえで必要な知識をくまなく詳述しており、内容的には女性を診る際に「役立つ」どころか、「不可欠な基礎」知識として、読者の経験年数や専門領域の隔てなく活用かつ楽しみながら読める一冊である。